

世界は「いれもの」の連続体であるようにみえることがある。

たとえば、わたしが手にしているエンピツである。このエンピツは、一ダースを単位にして、プラスチックの箱のなかにはいつていたもので、わたしは、その「いれもの」から一本を取り出して、机のうえに置いた。

だが、このプラスチックのエンピツ箱は、ついさっきまで、わたしの机のヒキ出しにはいつていた。ヒキ出しも「いれもの」である。その「いれもの」のなかに、エンピツ箱という「いれもの」がいつていた。いわば、ヒキ出しは、エンピツにとって、「いれもの」の「いれもの」だったのだ。

ヒキ出しは、わたしのキャビネットのなかにおさまっている。キャビネットも「いれもの」である。つまり、キャビネットは、エンピツの「いれもの」の「いれもの」の「いれもの」なのである。エンピツは、A 重の「いれもの」のなかにはいつていたのだ。

「いれもの」という、四文字のひらがなが、あまりかさなりすぎるので、これ以上この文字をかさねて使うことをやめたいが、キャビネットは、わたしの書斎という名の「いれもの」のなかにあり、そして、わたしの部屋は、家屋という、やや大きな「いれもの」のなかにある。一本のエンピツは、こう考えると、B 重、C 重の「いれもの」につつまれているのだ、といつてよい。そして、さらに、この一本のエンピツでさえ、考えようによつては、その肝心の部分をなす芯は、六角形の木材という「いれもの」のなかにびっしりとおさまっているのである。

① おなじことは、他のもろもろのものについてもいえそうだ。衣料品は箱という「いれもの」にはいり、その箱はタンスのなかにはいり、タンスは部屋のなかに置かれる。一枚の百円玉は財布にはいり、その財布はポケットのなかにいれられている。ものは「いれもの」に収容されるが、その「いれもの」は、さらにもうひとつの「いれもの」にいれられる。わたしが、この世界を「いれもの」の連続体と名づけるのは、このような意味なのだ。

じつさい人間は、「いれもの」のつくり熱中してきた。考古学者は、世界のあちこちで、歴史時代以前の人間の生活を復元してみせてくれるが、それらおびただしい出土品のなかに、なんと多くの「いれもの」がふくまれていることか。日本でも、縄文時代の弥生だのといった土器の多くは、たとえばツボであり、あるいはカメである。日本文化史のはじめをつげるのは、要するに「いれもの」なのであり、そして、文化史は、ある意味で「いれもの」のつくりの歴史なのであった。

ものがあれば、かならずといつていいほどそのものをいれる「いれもの」を人間はつくったり買ったりする。とりわけ女性は「いれもの」が好きだ。幼いころから、小さな箱をやたらにあつめて、おもてに千代紙などを貼り、そして、その箱のなかにおハジキだの、あれこれのこまごましたもののだのをいれる。デパートの子ども用品の売場というところに足をふみいれると、そこにあるのは、オルゴールつき的小箱だの手紙をいれる箱だの、とにかく、「いれもの」だらけなのだ。

少女時代だけではない。主婦になっても、「いれもの」をつぎつぎに家庭のなかにつくりあげる。身のまわりにも、各種各様の「いれもの」を配置する。箱だの、カゴだの、ハンドバッグをはじめとするもろもろの袋ものだの、とにかく、女の身辺は、「いれもの」で充満しているのだ。そしてあまり、「いれもの」に熱中してしまう結果、ハンドバッグのなかの財布のなかにはいつていべき肝心のおカネがなくなってしまうりする。

なぜ「いれもの」がこんなに好きなのか。たぶん、それは、「いれもの」を使うことが整理の第一歩であるからだ。わたしは、これまでに、あんまり書きすぎてしまったから、ここであらためて「整理学」についてうんぬんするのはいささか気がひけるけれども、ものの整理と「いれもの」とのあいだにはふかい関連がある。とにかく、あれやこれやの雑多なものを分類してひとまとめにしておくためには、② それらのものを収納するものが必要なのである。

とりわけ、こんにちのように、人間生活のなかに、おびただしい種類のものがはいりこんでしまった時代には、ほうっておいたら、とんでもない無秩序と混乱がうまれてしまうだろう。いっさい「いれもの」というものがない台所を想定してみたらよい。お手上げなのである。そこらへんに、ぼんというんなものをほうり出しておいて、はたして調理ができるか。できない。こんにち、台所が台所であるためには、数十種類におよぶ調味料がそれぞれべつの「いれもの」にいれられて、ちゃんと識別が

つくようになっていなければならないし、さまざまな食料品も、ビンだのツボだの袋だのにきちんとはいっていないなければならない。カンづめのカンも「いれもの」だし、キャンディの箱も「いれもの」である。こんにちの家庭の台所は、「いれもの」にみちあふれているのだ。興味のあるかたは、いちど、台所にある「いれもの」の数をしらべてみたらよい。その数は、たぶん、数百個におよばずである。

家庭のなかで人間が使うものが **D** 化すればするほど、「いれもの」の必要度は高くなる。無精なひとりものの下宿なら、万年床の枕もとに新聞紙をひいて、そのうえにバンとバターをむき出しで置いておくこともできるだろうし、衣料品も部屋の隅つこに積みあげるなり、カモイにぶらさげるなりしておくことができるだろう。簡便生活は、「いれもの」なしでも可能なのだ。しかし、この独身者の乱雑な室内でさえ、もしも、この人物がお茶を飲もう、ということになれば、やかんだのちやわんだのという「いれもの」がどうしても必要になってくる。まったく「いれもの」のない生活なんか、 **E** 的に

F 的にも不可能なことなのである。

ましてや、まがりなりにも、家庭という名のついた生活体のなかでは、やたらにたくさんの「いれもの」が必要だ。まえにみたように、家庭というのは、ダルマのおもちやのごとき多重のカラにつつまれているのである。

G 生活における「整理」が「いれもの」を要求するのとおなじように、 **H** や流通の面でも、「いれもの」問題は切実だ。消費者の手もとにとどくまでに、品物が傷ついたり汚れたりしないように、また、輸送効率を高めるように、メーカーや商店も「いれもの」の研究と開発に熱心になってきた。そして、かつて、むき出しのまま売られていたもろもろの商品も、こんにちの社会では、「いれもの」にはいるようになった。お豆腐やシラタキはポリエチレンの袋にはいり、タマゴもプラスチックだの厚紙だのでつくられたケースにはいつている。

さらに、船だの鉄道だのトラックだのに積みやすいようにコンテナ輸送がはじまった。「コンテナ」というのは、要するに「いれもの」ということだ。「いれもの」の大きさを **I** 化しておけば、なかにながはいっていようと、さまざまな

J 「にびったりとおさまる。積みおろしの時間は、バラ積みの運送にくらべて、三分の一とか四分の一とかに減つ

た、という。

飛行機の荷物にしたってそうだ。これまでの旅客機では、ご存じのように、トランクやスーツ・ケースは、バラバラのまま、荷物室にはこびこまれていた。しかし、新型のジャンボでは、旅客荷物は、ことごとくコンテナにいれられてしまう。カウターでうけとられた荷物は、まず、巨大な「いれもの」にはいつて、その「いれもの」が、飛行機に積みこまれるのだ。その積みこみ風景は、ちよつとした壮観である。ちよつとした物置ぐらゐの大きさのアルミ箱が、フォークリフトで持ちあげられて、あのジャンボの大きな胴体のなかに、つぎつぎに吸いこまれてゆくのである。わたしは、超大型の「整理学」の実例をみるような思いがした。

こんにちの社会は、いわば「いれもの」革命の時代なのである。家庭のなかを見まわしてみただけで、「いれもの」革命の兆候は、いくつでもみつかるといえる。われわれは、「いれもの」にとりかこまれ、そして、「いれもの」のなかで生活している。住宅産業論がさかんだけれど、「住宅」というものを、人間の「いれもの」(カプセル)として考える考えかたもこのごろ多くの論者によって提案されるようになってきた。まさしく、世界は、「いれもの」の連続体なのである。

「いれもの」は、実用的にいえば文字どおり、「もの」を「いれる」ための「もの」ということであつて、それ以上でも以下でもない性質のものである。

しかし、「いれもの」をたんに実用的機能の面だけで割り切つて考えることができないのも、人間のおもしろいところだ。もちろん、要するに、ものはいればそれでよい、というので、ありあわせの古いボール箱などを「いれもの」として使うこともあるが、それは、たとえば引越しのとき、といった臨時の「いれもの」であつて、まがりなりにも、生活備品としての「いれもの」には、われわれはなんらかの **K** 的くふうを凝らす。古いボール箱に紙を貼り、空きカンにはペンキを塗る。「いれもの」は、うつくしくなければならぬのだ。「いれもの」がうつくしくなければ、生活そのものがうつくしくないのである。

商品化された「いれもの」を買うときのわれわれは、ときとして、そのなかにはいるものを買うときよりも慎重である。たとえば、小麦粉だの砂糖だのは、日常の必需品であつて、べつに銘柄を指定することもないが、それらの食品をいれるキャニス

ターを買うときには、あちこちの店を歩きまわって、よいデザインの品物をさがす。値段が多少高くても、うつくしいものを手に入れようと一生けんめいになる。

タンスなどもそうだ。値段と実用性からいえば、デパートの特価品売場にたくさんタンスがならんでいるから、そのなかからえらばそれだよのだが、ながく使う家具、と思うと、なかなか L 一点ばりで気軽に買う気にはなれない。使われている材料だのデザインだのを吟味して、いいタンスをさがしまわる。

つまり、「いれもの」は、たんなる「ものいれ」ではないのである。^④「いれもの」はそれじたいの価値をもつのである。まえにあげた女性のハンドバッグなどもその一例だ。実用的機能からいえば、財布だの化粧品だのといった小物がそのなかにはいれどそれだよいで、極端にいえば、丈夫な紙袋だつて間にあう。しかし、そうはゆかない。ハンドバッグは、「ものいれ」なのではなく、それじしん、うつくしい「もの」でなければならぬのである。だから、ハンドバッグその他の袋ものに、高いお金を払う。

そればかりではない。「いれもの」がうつくしい「もの」であることによって、そのなかにはいるものの価値もすっかりかわってしまふからふしぎである。そのことが如実にわかるのは食器という名の「いれもの」だ。

M、ここに、一丁のなんの変哲もない豆腐がある。これを湯豆腐にして食べよう、と思う。そして、湯豆腐をつくるための「いれもの」は、いろいろある。

N、安上がりにやろうと思ったら、雑貨店に行つて、小さなアルミのナベを買つてきたらよい。このナベの底に昆布を敷き、豆腐を入れて火にかければ、やがて湯豆腐はできあがる。味もそうわるくはない。学生街の食堂などで湯豆腐といえば、だいたい、こんなふうに安上がりの「いれもの」にはいったもののことを意味する。わたしも、しばしば、そういう学生食堂の湯豆腐を食べてきた。

O、それだけが湯豆腐の「いれもの」なのではない。高級な湯豆腐の店では、京都の「たる源」でつくられた、小型の湯ぶねのようなたろで湯豆腐の料理をしてくれる。木のおいがぶんとして、たいへんに清潔だ。そして、とてもおいしい。

おいしいかわりに、学生食堂のアルミ・ナベの湯豆腐のねだんの数十倍のおカネを払わなければならない。

このふたつの湯豆腐は、どちらがうか。材料として使われている豆腐にも、もちろん、ちがひがあるだろう。ひとくちに豆腐といつても、いろいろつくりかたのうえでのコツだの原料の大豆の質だのがちがうから、上等の豆腐と、ふつうのそれとはおなじだとはいえない。

しかし、より大きなちがひは、「いれもの」のちがひなのである。すくなくとも、わたしのような味のシロウトは、^⑥「いれもの」で、完全に降参してしまふ。

P、日本の料理は、「いれもの」の芸術なのである。サトイモとエンドウ豆の煮つけ、といった、ごく素朴な料理でも、それが古九谷のうつくしい鉢にすこし盛りつけられて、サンショの葉などがあしらわれてみると、天下の珍味とみえ、ギンナンをホウロクで煎つたものが、黒ウルシの皿で出されたりすると、これも、すばらしい食事だ、と感じられる。まさしく、ここにあるのは、「いれもの」の Q である。

「いれもの」の Q は、こんにちのマーケティングの領域でも、しばしば使われている。容器のデザインをかえただけで、売上げが倍増した商品などもたくさんあるらしいし、われわれは、「いれもの」で商品を買つたりもする。

化粧品などは、そのいい例だ。中身にもちがひはあるのだろうが、クリームだのトニックだのはビンや箱のうつくしさで売っているようなものだ。化粧品のその性質を見きわめたうえで、かつて、労働組合などが、きわめて実質的な「いれもの」に化粧品をいれて、女子組合員に安く売ることを考えたが、それは成功しなかつた。人間というのは、ふしぎな動物で、なかなか、L 一点ばりにはなれないのである。

じつさい、われわれは、ものごとを「いれもの」によつてはかる習慣をかなりむかしから身につけてしまつてゐる。「いれもの」を意味する「うつわ」ということは、日本語では、人間の性格をはかることばとしても使われてきた。日本の思考様式は、人間というものは、それじたい、ひとつの「うつわ」なのである。

そして、その「うつわ」としての人間が、どれだけのものをいれる能力をもっているかで、「人物」が判定されてきた。

人間が、「うつわ」として **R** ということは、その人間が包容力に欠け、偏狭【考え方が狭いこと】な精神しかもっていない、ということだ。ある人間が責任あるしごとに適任でない、というとき、その人間は、その「うつわ」ではない、とわれわれはいう。それだけの責任をいれる「いれもの」として、その人間がふさわしくない、ということだ。

S などというコトワザもある。なにことをも包容できる大きな「うつわ」は、その輪郭がなかなかはっきりしない。だから、その「うつわ」が、はつきりしたすがたをとるまでには時間がかかるのである。

日本語で「器量人」というのは、「うつわ」がよくできている、ということだ。もともと、近代日本語では、「器量」というのは、おおむね女性の容色についての形容詞になってしまったが。「器用」というのは、「うつわ」としての人間が、みずからの「うつわ」の使いかたをよく知っている、ということである。

こんな例をあげていたらきりがなが、日本文化では、人間もまた、ひとつの「いれもの」なのであった。タンスや戸棚のように、この「いれもの」は「もの」をいれるものではない。人間という「うつわ」は、それをとりまく環境をうけいれる認識と評価能力の「いれもの」である。

そして、人間はその一生のなかで、その「うつわ」にたくさんさんの情報を収容し、それを処理する。つまり、当世ふうにいえば、人間の「うつわ」の大きさは、情報容量の大きさ、ということになるのか。日本人が、人間を「うつわ」として考えてきた、というのはその意味で、たいへんにおもしろいのである。

そして、それもこれもふくめて、われわれは、なんと多くの「いれもの」とともに生きているものか、と思う。アメリカのメーシー百貨店は、人間生活の必要品はなんでもそろえています、ということをするために、「乳母車から棺桶まで」という有名なキャッチ・フレーズを使った。しかし、よく考えてみると、乳母車も棺桶も、人間のからだの「いれもの」なのである。人間は、その人生を、文字どおり「いれもの」とともに送るのだ。

とするならば、われわれは、ときに身のまわりのもろもろの「いれもの」について考え、「いれもの」を大事にすることが必要であろう。すくなくとも、そうした側面から生活を考えるだけの「うつわ」でありたい、とわたしは思うのである。

(加藤秀俊「暮らしの思想」より・一部改変)

問一 文中の **A** ・ **B** ・ **C** にあてはまる漢数字を答えなさい。

問二 —部①「おなじこと」、—部②「それらのもの」、—部⑤「それはそれぞれ何を指しますか」。

問三 本文から次の文が抜けています。どの段落の前に入れるのが適当ですか。その段落の初めの五字を答えなさい。

いわば、それは、温泉地などで売っているいれこのダルマのおもちゃのようなものだ。ダルマは、ちょうどまんなかあたりで、上下ふたつの部分にわかれ、なから、ひとまわり小さなダルマが顔を出す。そして、この二番目のダルマのなから、こんどは第三のダルマが、というふうに、合計、五つか六つのダルマがとびだしてくるのだ。人間生活のさまざまな局面もまた、ダルマのごときものである。ものは、多重的ないれものに包まれて存在している。もしも宇宙人が、人間生活をつぶさに観察するなら、人間という生物は、やたらにたくさんさんの皮膜をものまわりにくつつける習慣をもっていることにおどろくにちがいない。アンコをぎゅうひでつつみ、そのまんじゅうをひとつひとつ紙でつつみ、それを折箱にいれ、さらに紙でつつみ……要するに人間は、あれこれのものを、つぎつぎに「いれもの」にいれることの好きな動物なのだ。

問四 文中の **D** と **I** 、 **E** と **F** 、 **G** と **H** には、それぞれ対義語的な意味で使われている漢字二字の言葉が入ります。次のアークから一つ選び、記号で答えなさい。ただし、同じ記号は二度使えません。

ア 標準 イ 理論 ウ 消費 エ 多様
オ 専門 カ 生産 キ 想像 ク 実際

問五 文中の「**J**」にあてはまる言葉を、「いれもの」のようにひらがな四字で答えなさい。

問六 —部③「『いれもの』革命」とありますが、どういうことですか。

問七 文中の **K** にあてはまる言葉を漢字一字で答えなさい。また、 **L** にあてはまる言葉を文中から探し、漢字二字で答えなさい。

問八 — 部④『いれもの』はそれしたいの価値をもつ』とありますが、どういうことですか。二点答えなさい。

問九 文中の **M** ・ **N** ・ **O** ・ **P** にあてはまる言葉を、次のア～カから一つ選び、記号で答えなさい。ただし、同じ記号は二度使えません。

ア じつさい イ だが ウ さらに エ なぜ オ たとえば カ もしも

問十 — 部⑥『いれもの』で、完全に降参してしまう』とありますが、どういうことですか。

問十一 文中の **Q** にあてはまる言葉を、次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 料理 イ 中味 ウ 魔術 エ 整理

問十二 — 部⑦『それは成功しなかった』とありますが、なぜですか。

問十三 文中の **R** にあてはまる形容詞を答えなさい。

問十四 文中の **S** にあてはまる四字熟語を漢字で答えなさい。

問十五 — 部⑧『その『うつわ』が、はつきりしたすがたをとる』とありますが、人間のどのような様子を指していますか。

問十六 — 部⑨『その意味』とありますが、どういう意味ですか。

問十七 — 部⑩『そうした側面から生活を考えるだけの『うつわ』でありたい』に見られる筆者の思いを、五十字以内で答えなさい。

二

次の1～10の文中の(カタカナ)を漢字で書きなさい。

- 1 (ゼッパン)になった本。
- 2 (テンコ)の時間は午前七時だ。
- 3 (アンジ)にかかる。
- 4 牛を(ホウボク)する。
- 5 首相の(キョシュウ)が注目される。
- 6 (ケイトウ)だてて考える。
- 7 事故の原因を(スイソク)する。
- 8 ルールに(シタガ)う。
- 9 魚がえさに(ムラ)がる。
- 10 人生の師として(ウヤマ)う。

う

得 点

得点
